1/4 東新

「神の火」のそばで
福井の原発半世紀 3

活動をすれば変わる

元下請け労働者 斉藤征二さん(79)

「命や労働環境は自分たちで守ろうと考えた」。原発の下請け労働者だった敦賀市の斉藤征二さん(七九)は十二月末、かつて通った市内の飲み屋街を歩きながら、仲間たちと語り合った当時を振り返った。原発の下請け労働者による全国初の労働組合を結成したのは、もう四十年近く前になる。

岡山県御津町(現岡山市)出身。高校を中退し、国鉄やたばこ販売など職を転々とした。たどり着いた北海道で配管の腕を磨いた。転機は親方のひと言。「原発の配管をやったら世界一の配管工になれる。腕を試してこい」。関西電力美浜原発(美浜町)の建設現場へ。知識はほとんどなかったが「原発で飯を食っていこう」と心を決めた。

原発の現場は、これまで経験したものとまるで違った。複雑に入り組む配管。汗が噴き出る暑さ。巨大な構造物を相手に、多くの業者が分担して作業する。「どこで働いているか分かっても、どんな意味のある作業か分からない」。線量計が壊れていることがあるなど、放射線管理はずさんに思えた。

日本原子力発電(原電)敦賀原発1号機(敦賀市)で、三次請け労働者として働いていた一九八一(昭和五十六)年一月、「給水加熱器から水が漏れているから直してほしい」と頼まれ現場に入った。三カ月後、ニュースでこれが事故隠しだったと知る。原電は秘密裏に修理をしようと運転を止めていなかった。敦賀原発は行政処分で六カ月間、運転停止に。日雇い作業員たちは路頭に迷った。

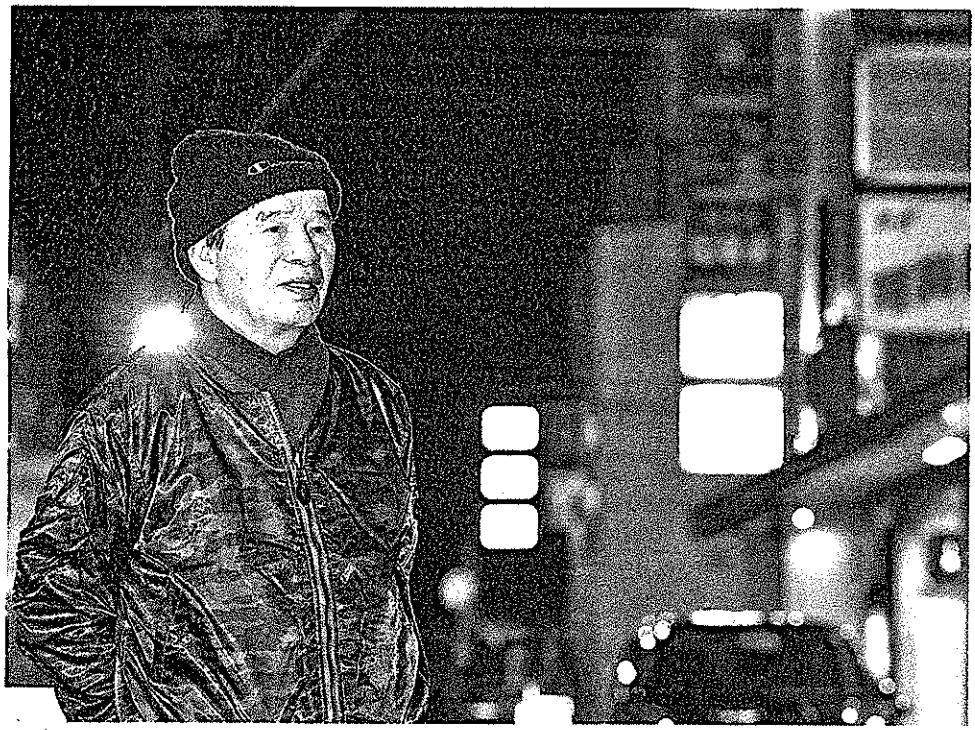
「赤旗」記者だった柴野徹夫さんとの出会いが再び運命を変える。「一人では勝ち目がない。組合をつくって交渉しないと」。組合結成を熱心に勧められ、覚悟を決めた。要求書案を手に毎晩、市内の飲み屋街で「労働環境を改善しよう。活動すれば変わる」と声を掛けた。何者かに家の窓を割られ、無言電話が何度も鳴った。怖かったが、仲間たちに支えられた。

同年七月、百八十三人の仲間と「全日本運輸一般労働組合関西生コン支部原子力分会」を結成。一方的な契約解除通告に反対し、改ざんを防ぐため被ばく線量記録の記入は、鉛筆からボールペンに改めるよう求めた。要求書を原電と元請け会社に突きつけようとしたが、団体交渉そのものを拒否された。「内容を見てできないというのなら納得できる。でも受け取らないのなら、絶対許せない」。地方労働委員会で申し立ては却下されたが、ボールペン記入などの改善を引き出した。小さな一歩でも、大きな一歩だった。

十五年ほど前、年齢を感じ原発の現場を離れた。敦賀に居を構えながら全国で講演活動を行い、経験を語っている。

原発の下請け労働者の環境は以前より改善されたとは思う。しかし、福島第一原発事故後、福島の作業員の被ばく限度量が、特例として一〇〇ミリシーベルトから二五〇ミリシーベルトへと引き上げられた動きもあった。使命感を持って作業をしている下請け労働者たちの環境が今も気掛かりだ。「国も国民も、労働者にもっと目を向けてほしい」

(高野正憲)



「命や労働環境は自分たちで守ろうと考えた」と当時通った飲み屋街で振り返る斉藤征二さん=敦賀市本町1丁目で(山田陽撮影)